



Laos

百萬頭の象の国にて ラオス

At the Lane Xang Kingdom Lao People's Democratic Republic

渡邊弘毅

WATANABE Hiroki

日本建設コンサルタント株式会社/
海外事業部技術部/グループマネージャー

1. はじめに

私はラオス人民民主共和国(以下、ラオス)を訪れる以前、ラオスがどのような国なのか全く興味がなかったし、それどころかラオスの位置を正確に答えることすらできなかった。しかし現在、私にとってのラオスは非常に馴染み深い国となっている。

2001年9月に(社)国際建設技術協会の「建設計画事前調査」において初めてラオスの土を踏んだ。以降、2003年12月からJICA開発調査「ビエンチャン市周辺メコン河河岸侵食対策計画調査」、2005年1月からJICA技術協力プロジェクト「河岸侵食対策技術プロジェクト」に携わり、首都ビエンチャン市には継続的に通っている。今ではラオス人の友人も増え、休日には彼らと共にあちらこちらへと出かけることも多い。

2. ラオスの概要

ラオスはインドシナ半島の中央部に位置し、南北に細長い国土である。国土面積は236,800km²で日本の本州とほぼ同じである。北部は中国、東部はベトナム、南部

はカンボジア、西部はタイ、北西部はミャンマーの5カ国に囲まれた内陸国であり、国土の約75%が山岳および丘陵地帯である。特に北部地域は標高1,000m以上の山地が広がっている。

メコン河は全長4,600kmのうち、ラオス国内およびラオスとミャンマー・タイの国境を1,865kmにわたり、北から南へ国土を縦断して流れている。気候は熱帯モンスーン気候に属し、乾期(12~4月)と雨期(5~11月)に分かれる。最低気温は20℃程度(12~1月)、最高気温は40℃(4月)を超える。

ラオスには約620万人(2005年7月)が居住しており、49民族からなるといわれている。

政治形態は共産主義であるが、市場経済メカニズムの積極的導入を通じて経済の活性化に努めており、1986年の市場経済開放以降、1988~2004年まで年平均6%の経済成長を遂げている。国民一人当たりのGDPは340US\$ (2003年)であり、世界の最貧国の一つといわれている。

3. 百萬頭の象の国

ラオスの礎となった国は、1353年にルアンプラバン周



■写真4ー杭出水制工の上で釣りをする近隣住民 ■写真5ー河岸侵食対策技術プロジェクトのカウンターパートとともに

辺に散在する公国を併合して建国されたランサーン王国である。この国の建国者はクメール王朝に支援された將軍ファー・グムであり、ラオス初の統一国家を成し遂げた偉人として、今でもラオスの英雄としての名を誇っている。

「ランサーン(Lane Xang)」とは「100万頭の象」という意味である。当時のメコン河沿川地域に野生の象が非常に多く生息していたことから命名されたといわれている。また、象は仏教において神聖な動物とされており、敬虔な仏教徒であるラオスの国民性がうかがえる。ラオスでは国民生活の中に仏教が溶け込んでいる。このためか国民性は温和で親しみやすく、人々は皆非常に気さくである。

4. 首都ビエンチャン市にて

首都ビエンチャン市はラオスのほぼ中央に位置し、メコン河左岸の自然堤防上に形成されている。市の面積

は3,920km²で9つの区からなる。人口は約67万人(2005年)で、世界的に見ても規模の小さな首都といわれている。ビエンチャン市に沿って西から東そして南へと蛇行しながら流下するメコン河は、ラオスとタイの国境を成し、対岸はタイのノンカイ市である。オーストラリアの援助で1994年に建設された友好橋により、タイとの交通路が確保されている。

(1)メコン河の河岸侵食対策

JICA開発調査では、この友好橋のたもとがパイロット工場の現場のひとつであった。この付近にはメコン河岸に石油備蓄基地が多く存在する。架橋される前はタイから舟運で石油を輸送していたためである。1990年ごろからラオス側の河岸侵食が著しくなり、2000年には石油備蓄タンクのおよそ10mの所まで河岸が後退していた。

メコン河沿川の公共施設や寺院、家屋等の資産を守るため、日本の伝統的護岸工法を河岸侵食対策として適用できるかどうか、開発調査において3箇所で行ったパイロット工事を実施した。この護岸工法は樹枝と石材を用いるもので、ラオスでの現地調達が可能である。さらに自然素材を用いるため水辺を汚染する心配がないうえ、その多孔性により魚類などの水生生物の棲息場所を創出できる環境にやさしい工法である。

今では、地元住民がパイロット工事で設置した杭出水制工を絶好の釣り場として利用している光景が見られる。



■図1ー位置図(出展:外務省ホームページ)



■写真1ーラオスとタイを結ぶ友好橋



■写真2ー河岸侵食対策前の石油備蓄タンク(2001年12月)



■写真3ーメコン河での粗朶沈床工の沈設



■写真6ービエンチャンの中心にそびえる凱旋門



■写真7ー友好橋の近くにあるブッダパーク



■写真8ー乾期のメコン河河床をマウンテンバイクで走行



■写真9ー梨のような食感の「マンバオ」



■写真10ーメコン河産の「バーニン」の塩焼き



■写真11 色とりどりの果実が並ぶ果物屋 ■写真12 一般家庭の台所 ■写真13 トラックの荷台に乗って通学する子供達



■写真14 ルアンプラバンの街並み ■写真15 ルアンプラバンのお洒落なレストラン ■写真16 モン族のナイトマーケット

(2) ビエンチャン市の暮らし

フランスのインドシナ植民地から独立後、社会主義体制をとって約20年近く鎖国のような状態が続いていたが、10年ほど前から外国人観光客を本格的に受け入れるようになった。ビエンチャンの市街地では、ヨーロッパ各国やオーストラリアからのバックパッカーが多く、主にビエンチャンのシンボルである「凱旋門」と仏像やヒンズーの偶像を集めた「ブッダパーク」を訪れている。

これら以外にはこれといった観光地はないが、壮大なメコン河を眺めていると時間を忘れてゆっくりと過ごすことができる。特にメコン河に張り出したレストランでサンセットを見ながら飲むビールは最高である。また、乾期にはメコン河の水位が10mも低下するため、河床において遊ぶことができる。地元の人々はここで、サッカーやバドミントンに興じている。

ビエンチャンには「ここが後開発途上国？」と思うほど食料や物資が豊富に見られる。市場には色とりどりの果実が陳列されている。野菜はほとんどが国産でメコン河の



■写真17 山岳地帯の風景 ■写真18 国道13号北線沿いにある天然温泉 ■写真19 山岳地帯の子供達

河岸などで栽培されている。一般家庭の食事は「カオニャオ」と呼ばれるもち米が主食であり、これにスープと「ラープ」と呼ばれる肉や魚とハーブを混ぜ合わせた惣菜が中心である。メコン河で採れる「パーニン」と呼ばれる魚の塩焼きや「マンパオ」と呼ばれる根菜果実も美味である。

IT機器の普及はめざましい。2001年にはほとんど見られなかった携帯電話

電話であるが、今や日本と同じように街中では携帯電話の着信音を耳にする。電話機もカメラ付カラーディスプレイである。驚いたことに、携帯電話で国際通話をするのに1分間で2,000kip(約24円)というコースもあるという。同様にインターネットも普及し、インターネットカフェを町の至る所で見かける。ラオスの若者を始め、オレンジ色の袈裟を着た僧侶がインターネットカフェでインターネットをしている光景さえもよく見かける。ここ5年の間に、ラオスでは急激に時代が変遷していると実感する。

しかし、少し郊外に出ると道路は未舗装となる。雨期には泥水の中を通過する自動車を、乾期にはホコリを巻き上げながら走行する通学トラックを見かける。この状況を見るとインフラ整備に必要な資金が不足しているラオスの財政事情がうかがえる。

5. 旧都ルアンプラバンおよび北部山岳部に

(1) 旧都ルアンプラバン

ランサーン王国の首都であったルアンプラバンは1995



■写真20 ブッダパークでのダンとの出会い ■写真21 学園祭でのひと時 ■写真22 カウンターパートへの「お好み焼き」の技術移転 ■写真23 家族が経営する地元食堂を手伝う友人

年世界文化遺産に登録された。市街地には19世紀後半に建築されたコロニアル調の建物が軒を連ねている。こちらでも欧米からの観光客が多く、ヴィラ式のホテルやお洒落なレストランが多く見られる。

ラオスは多民族国家という一面もあり、特に北部では様々な少数民族が暮らし、彼らはそれぞれ違う言語・文化や生活スタイルを持っている。夜になると、ルアンプラバンの目抜き通りには「モン族」の路上マーケットが並び、手作りの工芸品が売られる。

(2) 北部山岳地帯

ルアンプラバンを含むラオス北部は1,000m級の山岳地帯である。ビエンチャンからルアンプラバンを経て中国へと続く国道13号北線には、中国の桂林のような風光明媚な山々や天然温泉が存在し、低平地とは一変した光景が広がる。この道路は山岳地帯を通過するため、山腹を切土で通しているが、建設資金が乏しいため切土後の法面対策は施されていない。このため、雨期には法面崩壊による通行止めがしばしば起こる。

このような状況を回避するため、行政当局は点在する山岳民族に呼びかけ、部落ごとに道路の維持管理活動に参加してもらう取り組みを3年ほど前から始めている。

6. ラオス人との交流ーラオス文化に触れてー

(1) 友達の友達は皆友達…

私が2003年の年末にブッダパークを訪れた際、ラオス人の青年3人組に声をかけられた。そのうちの一人は日本語を勉強していて、ブッダパークを訪れる日本人と会話の実践訓練をするため、週1回はここに足を運んでいるという。始めは私も少々警戒していたが、話しているうちにお互いうちとけあい携帯電話番号を教えた。彼の名はウードンといい、ニックネームはダンである。ラオス人は「姓」で呼ぶのではなく、「名」で呼び合うのが慣例のようである。ダンはラオス大学工学部の2年生であった。

翌日早速、電話がかかってきた。ダンがアルバイトで英

語を教えている学校の学園祭へのお誘いだった。私もラオス人の日常生活に触れてみることに非常に興味があったので、遠慮なく学園祭に参加した。この学園祭は、学校施設等の維持費を賄う寄付を募るために毎年行われている。通常、学園祭や村祭りは夜を徹して行われるらしいが、この日は配電盤の故障で午前2時に終了となった。

以来、私がラオスを訪れるたびにダンは友人を紹介してくれる。ラオスでは「友達の友達は皆友達」であり「同じ集落の人は皆家族」という感覚を持っている。今では男女合わせて15人の友人がいる。

(2) 不条理な法制度

ここ数年、ラオスでは急激に自動車やバイクが増加している。一応、運転免許の制度はある。しかし、飲酒運転の禁止は法制度としてあっても遵守されていない。2005年11月、友人の一人がバイクを運転中に自動車に跳ねられ亡くなった。ひどいことに、飲酒運転だったという自動車の運転手は、現場にやって来た警察官に金を払い逃走してしまったのである。

ラオスでは未だに賄賂が横行し、このような悲惨な出来事が起こっている。経済発展をするにあたり、法制度の整備も急ぐ必要があると考える。

7. おわりに

ラオスは地理的理由から周りの国に比べ人口も少なく、訪れる観光客もまだ少ない。そのお蔭から未だに古くからの習慣、文化、自然が大切に保存されていると感じる。

しかし今、急激な近代化がラオスに訪れている。便利な生活は人間として誰もがあこがれることであるが、その反面、人間の生活環境に与える危険性も増加する。

日本は高度成長期に、文化の伝承や自然環境への配慮を疎かにしてしまったが、ラオスはこのような過ちを踏まないよう発展してゆくことを望んでいる。